



# 〈満洲文学〉について ー長谷川濬の作品を中心にー

魏, 舒林

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-03-25

(Date of Publication)

2013-08-21

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5727

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005727>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



## 論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

### <満洲文学>について

—長谷川濬の作品を中心に—

氏名： 魏 舒林

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 林原純生 教授  
(副) 福長 進 教授  
(副) 奥村 弘 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

### 【論文要旨】

日本が支配した一三年余の間に、多くの日本人達が大きな夢を抱いて、この(日本の生命線)、満洲へと移り住んでいった。満洲に移り住んだ日本人の中には、多くの日本文学者が含まれており、さらに、他の日本文学者も旅行者として満洲の地を訪れ、独特の(満洲文学)を創作し始めた。本博士論文では、(満洲文学)を満洲(関東州・満洲国)に在住する日本人による文学を注目し、特に満洲に渡って、そこから文学活動を始めた日本文学者の一人、長谷川濬の作品を視座として、彼はどのようなまなざしで満洲大陸を見つめたか、満洲国の内部においてこそ体験できた事柄を、どのように文学作品に取り入れたかを解明することを目標とした。

長谷川濬は明治三十九年、北海道の函館で生まれ、昭和七年、満洲国に渡った(当時二五歳)。中学時代には漁船に乗りこみ、カムチャッカ半島ベトロパウロスクで漁師の経験をしたこともある。船を下り、大阪外国語学校露語科に入学したが、卒業した直後、父の知人である大川周明の助力を受けて満洲国に赴いた。満洲国に渡ってからは、当時の満洲国官吏の育成機関である(大同学院)で学び、建国運動を担う地方県参事官たるべく訓練を受けた。卒業後は満洲国外交部に入って領事館に勤めている。また、辺境調査の仕事に携わっている。研究対象として昭和七年から昭和二年まで、長谷川濬が満洲国に居住した期間に発表された作品を扱った。まず、「烏爾順河」、「蘇へる花束」、「寛城子」などの作品を分析し、同時代の資料と比較しつつ、満洲国に存在する問題をどのように作中に取り入れたのかを明らかにした。また、バイコフ『偉大なる王』の翻訳に関する調査を行い、「海と湖と人間と」を分析することによって、長谷川濬が志向した(満洲文学)とは何かについて考察した。さらに、比較対象の一例として、渡満作家、日向伸夫「第八号転轍器」を分析した。同時代の渡満作家の小説を読み解くことによって、長谷川濬の独自の視座を明らかにした。以上のように、長谷川濬の作品分析や翻訳の事情をめぐって、具体的な検証に取り組んだ。各部・各章の概要は以下の通りである。

序論では、先行研究の整理を試みた。まず、明治から大正にかけての文学作品に(満洲)がどう描かれたかをまとめた。次いで、(満洲文学)に関する従来の研究を概観し、(満洲文学)の定義、研究現状についてなどを確認した。さらに、満洲国に渡って文筆活動を行った長谷川濬の経歴を略述し、この作家に関する先行研究をまとめた。そのうえで、長谷川濬の作品はどのように満洲国のさまざまな様相を映ったのか、彼が志向する(満洲文学)とはど

のようなものであるのかについて、本研究の問題提起を行った。

第一部は三章からなる。長谷川濬の作品を具体的にとりあげ、作品の背景に関する考察を行った。諸作品を分析することにより、満洲国がさまざまな問題が内在しており、それらに関して濬がどのように対峙していたのかを検証した。そして、制度上の建前と現実の間に存在するずれの違いが、作品に反映されていることを明らかにし、どのように作品に描かれているのかを明らかにした。

第一章では、「烏爾順河」（初出は昭和一四年）をとりあげた。この作品は満洲建国のために渡満した二人の青年と一人の女性の間の友情と愛情を主題にした作品である。「烏爾順河」に描かれている〈恋愛〉と〈建国〉の様相を抽出して、建国運動と密接な関係を持つ満洲国官吏の育成機関〈大同学院〉の動向、思想について検討を行った。また、満洲国建国初期に渡満した青年たちの考え方、生き方が「烏爾順河」にどのように描かれているのかを検証した。さらに、作品のタイトルである〈烏爾順河〉を歴史・地理的な観点から、同時代の資料を参考しながら検討し、作品の根幹である満洲大陸への憧憬と密接に関わっていることを明らかにした。

第二章では、小説「蘇へる花束」（初出は昭和一三年）をとりあげた。「この河をはさんで二つの国が対立してゐる」アルグン河について、同時代の資料と比較しながら、作中では「国境」の河としてアルグン河がどのように描写されているかを検討し、人間と自然が対立している様相を明らかにした。この二項対立を抽出することで、作者が本作を構築した過程の意図と主題を追求した。〈自然〉の河であると同時に〈国境〉の河としての辛辣さ、国家のテリトリー争いが自然空間の上に加えた社会秩序の残酷さを、小説を通して表現できたことを明らかにした。

第三章は、小説「寛城子」（初出は昭和一六年）をとりあげた。本作は、満洲国の官庁に務める日本人青年の〈私〉と同僚の「満人」（中国人）及び、その妻との間で展開されている民族間の軋轢を主軸としている。作中に見られる民族問題を抽出し、主に満洲国のスローガンとして唱えられた〈民族協和〉に着目して、満洲国建国に関する日本人と中国人の間の齟齬を検討した。また、同時代の「満人」が登場する諸作品と比較しつつ、長谷川濬が、満洲国内部から民族問題を凝視・告発する様相を明らかにした。

第二部は二章からなる。長谷川濬が志向する〈満洲文学〉とは、どのようなものであるかを明らかにした。各章の要旨は以下の通りである。

第一章では、長谷川濬がバイコフの名作「偉大なる王」を翻訳するに至ったか、そのプロ

セスを追跡した。当時の資料を参照しながら、長谷川濬とバイコフとの出会い、両者の交流、そして、彼がどのようにこの長篇の翻訳に取り組んだかを明らかにした。また、翻訳を通して、長谷川濬はさらに満洲の野性味溢れる大自然に憧れ、やがて、コサックの小説を書くために辺境へ赴くことになることを明らかにした。また、その翻訳を経験することにより、後に長谷川が動物文学に興味を持ち、戦後まで動物に関わる文学作品を執筆し続けたことを具体的に跡付けた。

第二章では、「海と湖と人間と」（初出は昭和二〇年）をとりあげる。本作は、満洲国に赴任した佐野が経験した出来事をめぐって、満洲国で職業を持ちながら作家として活動する人々の生活状況を描いた作品である。まず、佐野の視座から提示された文学者の悩みを抽出し、満洲国の中に存在する〈専業作家がいない〉問題や〈原稿料が安い〉問題について考察した。また、作者である長谷川濬は当時の創作環境の困難を乗り越え、満洲国の自然の中に溶け込んだ独自の満洲文学を作ろうと努めていた。その願望が作品の中にどのように反映しているのかを明らかにした。

第三部は補論として、長谷川濬と同時代の作家である日向伸夫を取りあげる。対象となるのは、日向伸夫の小説「第八号転轍器」（初出は昭和一四年）である。北鉄（ロシア帝国が満洲北部に建設した鉄道路線）がソ連から満洲国へ譲渡された時期に、北鉄に勤務していた中国人の転轍手（ポイントを操縦する運転手）の物語である。作者である日向は、中国人の立場から、北鉄譲渡による列車ダイヤの変更や鉄道勤務の内実の変化、あるいは従業員の言葉の壁の問題などを作品化していることを明らかにした。日向は異民族の中国人を「等しい人間」として作中に描いたことを明らかにした。

また、長谷川濬の年譜は『彼等の昭和』、『満洲浪漫——長谷川濬が見た夢』、『作文』第九六集、長谷川濬追悼号などに掲載されている。ただし、十分なものとは言えないので、今回、新たに判明した事実を大幅に取り込んだ年譜を附録として掲載した。

論文審査の結果の要旨

氏名	魏 舒林
論文題目	《満洲文学》について—長谷川濬の作品を中心に—

要 旨

本論文は、これまでほとんど知られることのなかった長谷川濬の活動と満洲国における日本語で作品を発表した作家をとりあげ、所謂日系満洲文学を明らかにしようとした試みである。以下審査の要旨を述べる。

序論は、これまでの日本の近代文学に見られる満洲の表現を取りあげ、満洲が特に日清戦争以降多くの文学者によって多用に題材とされてきた経過を述べた後、満洲国成立後の満洲国政府の文化政策とその文化政策のもとでの日本人作家の活動が主に文学雑誌に焦点をあてて論じられる。序論では、先行の研究史を踏まえながら、一九八〇年代以降、所謂《満洲文学》の研究は盛んになり、多くの研究書・評論が刊行されたが、個々の作家の作品研究においては、まだ論じられることが多いとして、長谷川濬をその典型的な作家とする。

第一部「満洲国における恋愛と建国—長谷川濬『烏爾順河』をめぐって」は、長谷川濬の経歴と作品『烏爾順河』に登場する《私》との関係から、この小説の読解を試みる。第一部では、満洲国建国の年に満洲に来た《私》と、先輩に当たる竹村との関係に注目する。竹村は、建国精神に燃えた人物であったが、匪賊討伐に参加した際に殺されてしまう。この建国精神に満ちた竹村と《私》は、一人の女性への恋愛を巡って対立するのであるが、その竹村と《私》の対立の背景となる心理的であると同時に思想的な相違と彼ら各々の内部の葛藤を、本章では、長谷川濬の経歴の調査することから、その対立の背景が理解できるとする。第二章では、その長谷川濬の経歴が新たな調査の結果として提示される。長谷川濬は昭和七年に大阪外語学校露語科を卒業し、同年五月に渡満したこと、渡満直後に満洲国資政局指導部訓練所に入り地方参事官となるための訓練を受け大同学院一期生として卒業したこと。その大同学院の前身は、自治指導部自治訓練所が改称された資政局訓練所であり、大同学院は将来満洲国政府の中央や地方の官吏となるべく訓練を受けたこと。自治指導部自治訓練所の上級組織自治指導部が養成を目指した自治指導員とは「天日ノ下ニ過去一切ノ苛政、誤解、迷想、紛糾等ヲ掃蕩シ喝シテ極楽土ノ建立ヲ志スニ在リ」（「自治指導部布告第一号」という精神にあったことなど、自治指導員は参事官として県公署の組織に参画し、治安や宣撫活動に従事したこと等を踏まえ、本章では竹村と《私》は参事官と推定できるとする。さらに本章では、この小説に描かれた満洲の風土、特にウルシュン河（烏爾順河）に注目する。ウルシュン河は、当時各民族が共存する資源の豊富な河川であったとされ、竹村と《私》の造型、ウルシュン河という象徴から、『烏爾順河』は満洲国の建国の理念を表現した小説であるとする。と同時に、本章では、小説末尾の親友と恋人を失った《私》の孤独と、《私》の目から見たウルシュン河は荒涼たる光景として写ったことを指摘して、『烏爾順河』には理想と現実という問題が存在するとする。そして、その満洲国における理想と現実との乖離の問題を長谷川濬は常に小説のテーマとして抱き作家活動を行ったとする。第二章は「国境線としてのアルゲン河」と題され、長谷川濬の「蘇へる花東」が考察の対象となる。長谷川濬が昭和十二年に関東軍の軍政部が行った国境全線にわたる兵要調査にロシア語通訳として同行した事実を前提とした後、本章では主人公狗刺子の目を通してのアルゲン河の自然とその雄大さを描かれているとし、その自然の雄大さは、氷ったアルゲン河を渡ってロシア兵に射殺された狗刺子の兄黒小子の悲劇と対比されているとし、長谷川濬は、この小説の中に本来の自然を見、その自然によって人間と国家が作り上げた国境線という人為的なものの矮小性を表

主査記載  
氏名・印 林原純生

現したとする。第三章「満洲国における民族協和」は、「寛城子」を論じる。この作品における、日本人である主人公《私》と職場の同僚である上海出身の「満人」の青年Kとの友情、K夫妻との交流、そして《私》とKとの対立、Kの失踪という展開は、同時代の満洲国に渡った日本人の共通に抱えた問題、満洲という場での異なる民族の協和が可能かどうかという問題を個人と国家間の次元双方から問いかけるものであるとし、「寛城子」は、同時代の文学のなかでも珍しく民族協和の問題を直接的に扱った作品として評価すべきものとする。

第二部第一章は「長谷川濬と『偉大なる王』」として、長谷川濬のバイコフ作品の翻訳『偉大なる王』の意義に触れる。『偉大なる王』の翻訳に従事することによって長谷川濬は、三河地方への関心を深め、北辺の自然と動物への憧憬と持ったとして、その憧憬は彼の「海拉爾の宿」等の紀行文に端的に見られるとする。また、本章は、長谷川濬が戦後においても動物文学とロシア文学に持続的な関心を持っていたことを指摘し、『偉大なる王』の翻訳の意義を確認する。本章はロシア文学と長谷川濬との関係をバイコフの作品の翻訳を通して論じたものであるが、戦後の長谷川濬のロシア文学の翻訳については、さらに論じるべきであろう。第二章「満洲国に生きる文学者の一側面」は、長谷川濬の「海と湖と人間と」を中心として、満洲国における文学者の自立の問題が扱われる。本章は主人公佐野の憧憬や、同時代の満洲を訪れた文学者達の証言をもとに、満洲国において作家として自立することの困難さを経済的な面と、満洲国の文化政策の双方の面から明らかにし、同時に「海と湖と人間と」という作品の主人公の経歴が長谷川濬のそれと類似することから、この作品は満洲国における《満洲文学》の確立というテーマを取りあげたものとし、そのテーマは文学の自立という本質的な問題に直面した長谷川濬の抱えた問題と深い関係を持つとする。

第三部第一章は「《満洲文学》のある一面について—日向伸夫『第八号転轍器』をめぐって」として、長谷川濬以外の満洲を舞台とした小説を論じる。本章は日向伸夫の略歴を調べ、この作品が同時代に高く評価されたことを踏まえ、『第八号転轍器』は北滿鉄路が満洲国に譲渡された時点を中心として設定され、主人公を「満人」とした作品、つまり日本人以外の異民族への心理を描いた作品として評価できるとし、五族協和という満洲国の建前に対して、本作品は植民地のメタファーを内包し、同時に満洲国の内部へのリアリスティックな描写が、満洲国に生きる個々の人間の生活という視野を獲得した作品として改めて評価されるべきであるとする。

以上のように本論文は、所謂《満洲文学》に位置づけられるとする二人の日本人の文学者の経歴と作品を調べ、彼らの、彼らの文学営為の内実を明らかにしようとしたものである。長谷川濬については、研究史の上でほとんど触れられたことのない作家であるが、本論文は乏しい資料のなかから、長谷川濬の経歴と作品を考察したものとして評価できよう。歴史上および文学史上の満洲国と《満洲文学》が孕む問題については、より先鋭な問題意識が必要であり、本論文の、作品を作家の経歴から読み込む姿勢は、文学作品の読解を平板化し、作品世界の独自性を軽視する趣きがないではなく、また、日本以外のアジア諸国の研究をも視野に入れて論じる必要があると思われるが、文学史上の困難な問題について一個の見解を提出した意義は認められよう。よって本審査委員会は、論文提出者魏舒林が博士（学術）の学位を授与されるに足るとの結論を得た。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	林原純生	副査	教授	奥村 弘
副査	教授	福長 進	副査	准教授	田中康二
副査	教授	鈴木義和			